

思春期病棟を 「発達障害」の視点から 作り直した病院がある

大阪府立精神医療センターの試み

本稿では、大阪府立精神医療センターの思春期病棟の運営方法と、その基礎にある考えを紹介していきます。これを発表することで、同じ悩みを持ちつつも頑張っている他病院の思春期病棟のスタッフの皆さんが意見交換できるきっかけになればよいと思っています。

*

私はときどき、患者さんたちが情報交換をしているインターネットサイトを見ることがあります。患者さんが精神科で働く私たちをどのように見ているのかを知るのに参考になるからです。

例えば、患者さんが挙げている「よい病院」とはどういう病院でしょう。必ず出てくるのが「お話を聞いてくれる」という言葉です。

精神科において、言語によるコミュニケーションを主としたカウンセリングが大きなウエイトを占めるのは事実です。そして患者さんのなかに「お話を聞いてほしい」欲求は確かに大きなものがあります。しかし、思春期は病院でのカウンセリングだけではなく、できるだけ「なま」の人間

関係から多くを学び、社会のなかで生きていくための対処法を身につけるべき時期です。その意味では社会から隔離している期間はできるだけ作らないに越したことはありません。

ただその一方で、思春期病棟に発達障害圏の患者さんが増加した現在、入院治療が長期化している現実もあります。これが、病院という狭い社会にだけ適応できる患者さんを育成してしまう結果を生みます。

思春期の入院治療のこのようなジレンマを、私たち思春期病棟で働く看護師は臨床のなかでどのように克服し、具体化していけばよいのでしょうか。

この特集では、成長著しい時期である思春期の患者に対して、私たちの病棟がどのようなことをこころがけ、どのような手段を用いてケアを行ってきたのか、また、今後どのような方向性に向かおうとしているのかを、その試行錯誤の経緯と共に紹介していきたいと思います。